

札幌市立大学
教員研究紹介

2020



札幌市立大学
SAPPORO CITY UNIVERSITY

**札幌市立大学
教員研究紹介**

2020

札幌市立大学はデザインと看護の2学部、2研究科、助産学専攻科を設置し、「人間重視」と「地域社会への貢献」を基本理念に掲げ、デザインと看護の特色を活かした教育・研究・社会貢献活動に取り組んでいます。本冊子は産学官金連携・地域連携等にさらに積極的に取り組むため、多くの方々に本学教員の最新の研究事例をご紹介することを目的に発行いたしました。
札幌市立大学教員の研究活動に関心を持っていただければ幸いです。

1. デザイン学部

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	頁
1	人間空間デザイン	教授	齊藤 雅也	北海道建築の環境・設備の系譜と熱環境デザイン	1
2	人間空間デザイン	教授	椎野 亞紀夫	地域資源を活用した初等教育活動の実践と評価	1
3	人間空間デザイン	教授	山田 良	風景と空間デザイン	2
4	人間空間デザイン	准教授	小林 重人	ゲーミングの力で自分たちが望む未来をつくる	2
5	人間空間デザイン	准教授	武田 亘明	クリエイティブ人材育成のための実践的学びのデザイン	3
6	人間空間デザイン	准教授	森 朋子	歴史・文化・自然を活かした都市デザインに関する研究	3
7	人間空間デザイン	准教授	山田 信博	既存の建物や空間を活用した地域コミュニティの活性化	4
8	人間空間デザイン	講師	石田 勝也	環境情報を使用したメディアアート表現	4
9	人間空間デザイン	講師	大島 順	札幌市駒岡小学校屋上緑化施設における植生環境の実態調査	5
10	人間空間デザイン	講師	片山 めぐみ	古民家を活用したメディアミックスによる新たな場づくりと地域活性	5
11	人間空間デザイン	講師	小宮 加容子	ユニバーサルな遊びのデザインに関する研究	6
12	人間空間デザイン	講師	須之内 元洋	行政や障がい者支援団体が運営する持続的アール・プリュットデジタルアーカイブの設計	6
13	人間空間デザイン	助教	金子 晋也	北海道における木造建築デザイン	7
14	人間情報デザイン	教授	細谷 多聞	触覚刺激の調整能力を有する幼児向け玩具のデザイン	7
15	人間情報デザイン	教授	石井 雅博	科学的観察手法に基づく人間の特性解明とそのデザイン応用	8
16	人間情報デザイン	教授	安齋 利典	落書きコミュニケーション基にした発想とデザイン思考の関係に関する研究	8
17	人間情報デザイン	教授	柿山 浩一郎	3Dプリンタを用いた設計図作図手法教育の為の補助ツールの活用	9
18	人間情報デザイン	教授	藤木 淳	発電エンターテインメント	9
19	人間情報デザイン	教授	三谷 篤史	口腔ケアの基礎技術を学ぶための口腔ケアシミュレータの開発	10
20	人間情報デザイン	教授	若林 尚樹	落書きコミュニケーションによる視覚的対話と、それを活用したワークショップの研究	10
21	人間情報デザイン	准教授	張 浦華	陶芸装飾技法の研究及び作品制作	11
22	人間情報デザイン	准教授	横溝 賢	ランブリングデザイン運動のすすめ	11
23	人間情報デザイン	講師	大渕 一博	授業協力から発展した地域貢献	12
24	人間情報デザイン	講師	金 秀敬	「甘さ」に着目したマルチモーダル知覚情報の「干渉構造」解明に関する実証研究	12
25	人間情報デザイン	講師	福田 大年	市民みんなでスケッチし合ってアイデアを生み出す方法の開発	13

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	頁
26	人間情報デザイン	講師	松永 康佑	数式に基づく曲線の深度情報による可視化表現	13
27	人間情報デザイン	助教	矢久保 空遙	音の特徴と表現の関係に関する研究	14
28	共通教育	教授	町田 佳世子	英語の会話の特徴を活かした小学校の英会話教育	14
29	共通教育	准教授	松井 美穂	アメリカ南部文学研究	15
30	共通教育	准教授	丸山 洋平	人口移動と家族形成行動との関係を明らかにする研究	15

2. 看護学部

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	頁
31	基礎看護学領域	教授	定廣 和香子	デリバリー方式によるアート・イン・ホスピタル (in 北海道)	16
32	基礎看護学領域	教授	樋之津 淳子	大学と医療施設の協働による看護師の継続教育の効果	16
33	基礎看護学領域	准教授	大野 夏代	医療者の外国語能力の改善に向けて	17
34	基礎看護学領域	講師	檜山 明子	転倒予防看護に関する研究	17
35	基礎看護学領域	講師	武富 貴久子	卒前卒後の看護学教育をシームレスにつなぐ試み	18
36	基礎看護学領域	助教	渋谷 友紀	ケーススタディで重要視する考え方と指導上の困難	18
37	基礎看護学領域	助手	高橋 葉子	NICUに勤務する看護職の看護技術について	19
38	看護管理学領域	講師	矢野 祐美子	看護管理者のための継続学習ネットワーク構築	19
39	看護管理学領域	助教	鬼塚 美玲	母親役割を持つ看護師のワーク・ファミリー・コンフリクトにおける因果関係モデルの検証	20
40	小児看護学領域	教授	松浦 和代	モンゴル国における発育性股関節形成不全ハイリスク群への育児指導とその評価	20
41	小児看護学領域	助教	牧田 靖子	中堅看護師に対する相互実演型プログラム研修の効果	21
42	母性看護学領域	教授	荒木 奈緒	胎児異常を診断された女性と家族への支援	21
43	母性看護学領域	講師	黒田 紀子	NICUに入院する児の両親が在宅移行を決断した背景の因子探索	22
44	母性看護学領域	講師	森川 由紀	女性への意思決定支援について	22
45	母性看護学領域	講師	山本 真由美	助産学実習前後のOSCE課題「新生児観察」の得点から教育方法を考える	23
46	母性看護学領域	助教	石引 かずみ	助産学専攻科におけるプロジェクト学習の効果と課題	23
47	母性看護学領域	助教	大友 舞	妊娠初期の女性の口腔保健に関する研究	24

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	頁
48	成人看護学領域	教授	川村 三希子	認知症を伴う高齢がん患者の疼痛マネジメントに関する研究	24
49	成人看護学領域	教授	卯野木 健	①ICUにおける人工呼吸患者に対する身体拘束と組織的因子に関する検討 ②計画外抜管と死亡率に関するSystematic Review ③PICSに関する多施設研究	25
50	成人看護学領域	教授	小田 和美	生活習慣病とともに生きる人とその家族への効果的な援助方法に関する研究	25
51	成人看護学領域	准教授	神島 滋子	①ナースコールと電子カルテデータの2次利用 ②ITを用いた双方向授業 ③高次脳機能障害看護師の当事者研究	26
52	成人看護学領域	准教授	菅原 美樹	デルファイ調査によるクリティカルケア看護専門看護師の直接ケアコンピテンシーに関する研究	26
53	成人看護学領域	准教授	藤井 瑞恵	透析患者の生活支援	27
54	成人看護学領域	講師	工藤 京子	呼吸器疾患患者のネット環境状態	27
55	成人看護学領域	助教	柏倉 大作	心不全患者の塩分制限に関連した食生活の実態とサルコペニアの関連性検討	28
56	老年看護学領域	教授	貝谷 敏子	創傷・オストミー・失禁領域に関するアウトカム研究と医療経済分析	28
57	老年看護学領域	准教授	村松 真澄	高齢者の口腔看護データベースシステムの開発に関する基礎研究	29
58	老年看護学領域	講師	原井 美佳	寒冷な特別豪雪地帯の高齢者に対する健康啓発プログラムの開発	29
59	老年看護学領域	助教	中田 亜由美	高齢者相互の健康支援基盤構築に関する研究	30
60	精神看護学領域	准教授	守村 洋	メンタルヘルスに関する研究	30
61	精神看護学領域	講師	伊東 健太郎	精神看護学シミュレーション教育の効果	31
62	在宅看護学領域	教授	菊地 ひろみ	明日の在宅看護を担う若手訪問ナース育成の取り組み	31
63	在宅看護学領域	講師	高橋 奈美	在宅で療養する筋萎縮性側索硬化症患者とその家族への看護	32
64	地域看護学領域	教授	喜多 歳子	子どもの貧困対策に関する保健師活動の質的研究	32
65	地域看護学領域	准教授	本田 光	子育て世代における地域との“つながり”	33
66	地域看護学領域	助教	近藤 圭子	高齢者の自己効力感と健康への意識に関する研究	33
67	地域看護学領域	助教	田仲 里江	大学と遠隔地の病院をWEB会議システムでつないだ中堅看護師研修の効果検証	34

2020.4.1 現在

※2020年度着任者は除く

1. デザイン学部

齊藤 雅也

教授 デザイン学部（人間空間デザイン）

SAITO Masaya

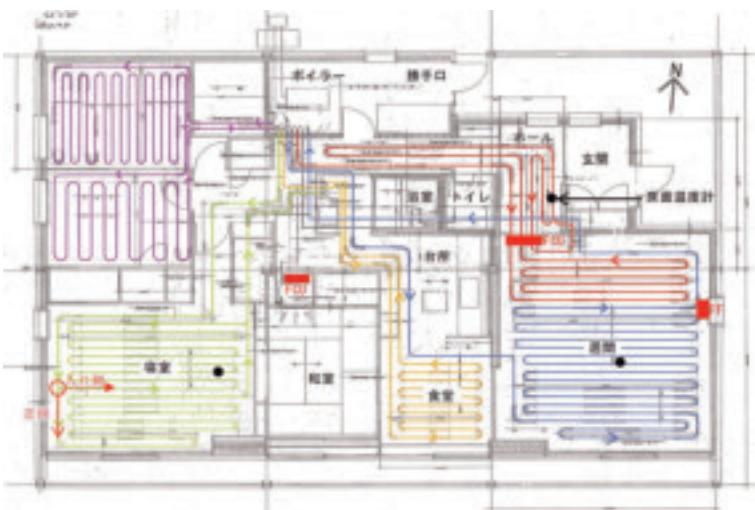
キーワード：建築環境、建築設備、快適性、想像温度、住みこなし

北海道建築の環境・設備の系譜と熱環境デザイン

【研究の概要】

本研究は、北海道における近代建築の環境・設備の系譜を整理して、より高度な快適性と省エネ性が得られる環境・設備デザインを提案することである。

右図は、北海道の近代建築史を代表する「札幌の家（建築家 上遠野徹自邸, 1968）」の床暖房配管図である。北海道の住宅で最初に温水床暖房を採用した例で、外皮の断熱性を高めることによって温房効果が高まることが実証された。構造種別による暖房、換気設備などの変遷を踏まえて今後の北海道建築に求められる熱環境を提案する。



（作図：廣林 大河）

椎野 亜紀夫

教授 デザイン学部（人間空間デザイン）

SHIIINO Akio

キーワード：子ども、公園、バリアフリーデザイン、連携授業、フィールドワーク

地域資源を活用した初等教育活動の実践と評価

【研究の概要】

小学校における総合的な学習の時間等の地域を対象とした教育活動と連携をはかり、都市公園等の子どもにとって生活空間である地域資源を対象としたフィールドワーク、作品制作等の教育実践を行った。札幌市立大学デザイン学部学生 12 名、看護学部学生 2 名が参加し、札幌市立常盤小学校 4 年生児童との総合的な学習の時間を活用した公園調査、デザイン提案、成果報告会開催を行った。



写真：小学生十大学生の公園調査



図：デザイン学部生による作品

山田 良

教授 デザイン学部（人間空間デザイン）

YAMADA Ryo

キーワード：建築意匠・デザイン、現代美術、環境芸術

風景と空間デザイン

【研究の概要】



建築デザイン・環境デザイン・空間に
係る作品の制作および研究。

上：《Arctic Installation》 2017
環境芸術作品、
(ノルウェー・ボーデー)



中：《107 m³のパビリオン》 2018、
環境芸術作品、
(札幌市紅桜公園)



下：《Perception Corridor /
知覚回廊》 2019、
建築設計、
ランドスケープデザイン、
(ノルウェー・ノットオーデン)

小林 重人

准教授 デザイン学部（人間空間デザイン）

KOBAYASHI Shigeto

キーワード：ソーシャルデザイン、進化経済学、複雑系科学、
社会シミュレーション、知識科学

ゲーミングの力で自分たちが望む未来をつくる

【研究の概要】

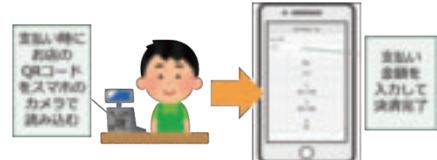
考え方や立場が異なる人たちが共通の知識基盤を形成して話し合うことができる「ゲーミング」と呼ばれるシミュレーションゲームの開発と運用を行っています。見たことも聞いたこともないものを相互に理解するためのツールとしてだけではなく、合意形成やシステムデザインのためのツールとして実際の現場で活用されています。

これまでに、特定の地域でのみ流通する「地域通貨」の仕組みの理解や流通デザインのための「地域通貨ゲーム」や人々の眠れるスキルを生かしてイノベーションの達成を目指す「スキル組み合わせゲーム」、そしてレゴブロックを用いて中高生に経済の考え方方に触れてもらうための「スマホ製造ゲーム」など、誰もが楽しく夢中になれるゲーミングを独自に開発しています。

特に「地域通貨ゲーム」では、来たるキャッシュレス社会の到来に向けて、独自に開発を行ったデジタル通貨（Com-Pay）を使った実験を行い、お金のデジタル化が私たちの暮らしにどのような影響を与えるのか検証を行っています。



←QRコードを用いた電子地域通貨の
決済アプリを開発し、ゲーミング・
シミュレーションという手法で実験



武田 亘明

准教授 デザイン学部（人間空間デザイン）

TAKEDA Nobuaki

キーワード：人材育成、地域活性化、生涯学習、
コミュニケーション、企画デザイン

クリエイティブ人材育成のための実践的学びのデザイン

【研究の概要】

(1) グローバル循環型人材育成教育プログラムの開発

神戸情報大学院大学との共同研究として、アフリカから留学生を受け入れ日本企業とマッチングを行い、帰国後起業することを目指した教育プログラムの開発を行った。

(2) まちの小さな音楽会の企画運営

第12、13、14、15回まちの小さな音楽会の企画運営（札幌市立大学公開講座として実施）4回の音楽会のポスター・デザイン、プログラム・デザイン、企画・運営を武田ゼミ4年生4名が取り組んだ。音楽会はオカリナ、ピアノ、ギター、ビオラ、読み聞かせを行った。4回目のコンピュータ音楽は中止となった。

(3) 道総研林業試験場と共同研究計画の基本設計

産官学金交流会から絶滅の危機にある北海道クランベリーの再生事業について基本計画の作成を行った。

(4) 地域活性化と教育に関する啓蒙・指導

「社会イノベーションとこれからの学びのあり方」と題して、日高教育振興会主催研修会で、日高管内小中学校、教育委員会関係者向けに、新学習指導要領における社会に開かれた教育課程とプログラミング教育および生涯学習と地域振興に関する講演を行った。また、当別町立義務教育学校の校舎設計にあたり社会に開かれた学びを実現するための指導助言を行った。

森 朋子

准教授 デザイン学部（人間空間デザイン）

MORI Tomoko

キーワード：都市デザイン、歴史的環境保全、集落町並み、
文化的景観

歴史・文化・自然を活かした都市デザインに関する研究

【研究の概要】

昔の生活様式に沿って形成された歴史ある都市や町並みを守りながら、それを現代の生活様式に合わせ、いかに開発整備していくか、世界遺産などの歴史的都市景観の保全計画手法に関し、「現場が教科書」をモットーに現地調査を基本に研究を行っています。

時代は量から質へ、都市空間・景観も、その都市・地域が持つ個性をアイデンティティとして活かした計画手法が必要です。一方、都市デザインという分野は、一つの建築ではなく多くの建築群で構成された空間、いわゆる町並み景観を対象にします。それは、多く人が関係する空間であり、その空間が持つアイデンティティを守っていくかどうかなど、将来像に対する合意形成が必要な場でもあります。

地域が活かすべき個性とは何か、専門家として都市のデザインを、ひいてはまちづくりを正しい方向に導く一助となればと、研究をしています。



カトマンズ盆地世界遺産暫定コナ集落の町並

山田 信博

准教授 デザイン学部（人間空間デザイン）

YAMADA Nobuhiro

キーワード：建築計画、団地再生、既存活用、地域再生

既存の建物や空間を活用した地域コミュニティの活性化

【研究の概要】

日本では、高度経済成長期の1970年頃に公共建築や公的住宅団地が供給されました。それらの建物は建設後約50年が経過し、老朽化が目立っています。耐震基準が低く需要が無い建物は解体することになりますが、まだ使える建物はストックとして新たな活用を見出す必要があります。

例えば廃校した小学校や、公的な住宅を地域の事情に対応した用途で活用した事例が各地で見られています。公的な住宅は比較的大きな敷地に住棟が配置されており、樹木などの自然が豊かで屋外空間も大きなスペースがあります。そのような場を地域の共有の資源として、行事や催し物などの活動を行ったり、日常の交流の場として整備し、その効果を検証し、今後の課題などを整理する研究を行っています。



札幌市南区で実施した事例

石田 勝也

講師 デザイン学部（人間空間デザイン）

ISHIDA Katsuya

キーワード：メディアアート、環境、アートエンジニアリング

環境情報を使用したメディアアート表現

【研究の概要】

人類が地球環境へ及ぼす影響は、自然と社会、どちらにおいても我々の生きる環境を変容させつつある。自身の研究では、環境側の対象を「気象現象」に絞り、生活者の日々の暮らしに変化をもたらすデザイン方策を見出す研究を行っている。その上で2019年度は札幌国際芸術祭の関連事業であるSIAFラボの活動として、2つのプロジェクトを進めた。

その一つが札幌資料館で行われた垂氷まつりでの環境氷柱光壁である。これは札幌市中央区大通近辺に設置した環境センサーから取得されたデータをLEDテープを使用して光の壁として表したメディアアート作品である。

もう一つは、札幌市市民交流プラザSCARTSで行われた企画「Winter Change」にて展示された雪堆積場のタイムラプス作品である。これは札幌市西区福井にある雪堆積場にカメラを設置し、リアルタイムに蓄積される写真から日々移り変わる堆積場の風景をタブレット端末のインターフェースを通して眺めることができる作品となっている。普段は知ることのない堆積場の風景を通して札幌の新しい視点を露わにする試みを行った。



大島 卓

講師 デザイン学部（人間空間デザイン）

OSHIMA Makoto

キーワード：ランドスケープデザイン、牧場景観、地域再生、
産業遺産の動態保全

札幌市駒岡小学校屋上緑化施設における植生環境の実態調査

【研究の概要】

2010（平成 22）年の施工後、約 10 年が経過した札幌市立駒岡小学校の屋上緑化施設を対象とし、植生環境の実態調査を実施した。主として竣工当時の導入植物種の生育状況の確認、約 10 年間での植生環境の経年変化について調査した。調査の結果、竣工当時の導入植物種の生育状況や、小学校周辺の森や河川といった周辺環境から飛来し成長したと想定される導入植物種以外の植物種（シラカンバ、ヤナギ類など）の存在・生育状況が明らかになった。



写真-1 2010（平成 22）年 竣工当時の様子



写真-2 2018（平成 30）年 調査時の様子

片山 めぐみ

講師 デザイン学部（人間空間デザイン）

KATAYAMA Megumi キーワード：地域活性、メディアミックス、SNS、古民家

古民家を活用したメディアミックスによる新たな場づくりと地域活性

【研究の概要】

北海道浦臼町の古民家を舞台に、現実の場所とSNSの物語情報を連携させ、交流拠点を創出する社会実験を行った。結果、1ヶ月間に500名余りが訪問し、55名がSNSを見て訪れた。現地を訪問した SNSの読者を対象にした調査から、物語への没入やキャラクターへの共感、古民家へ再訪したいといった愛着、自身も古民家で活動したいといった自己準拠の心理が醸成されたことが分かった。また、物語キャラクターに共感させ、現実空間で既知感を与えるような空間の作り込みが重要であることが分かった。プロジェクトの参加学生が地域おこし協力隊として現地でカフェを運営することになったことも成果のひとつである。



小宮 加容子

講師 デザイン学部（人間空間デザイン）

KOMIYA Kayoko

キーワード：キッズデザイン、ユニバーサルデザイン

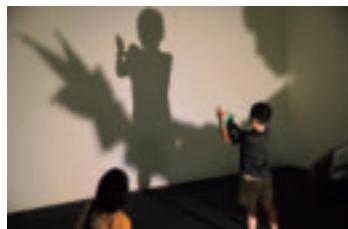
ユニバーサルな遊びのデザインに関する研究

【研究の概要】

誰もが同じように参加し、楽しむことができる、ユニバーサルな遊び場、道具のデザインとはどのようなものなのか、配慮すべき点は何か、検討および遊びイベントの実施による検証・考察をする。本年度は3カ所で、異なる内容の遊びワークショップを実施した。以下に、その一部を紹介する。

【Connekid!2019「はっぱっぱ】

2019年8月10日（土）、JRタワーエスタ屋上にある、そらのガーデンとプラニスホールにて実施した。「木」をテーマに、屋内外に複数の遊び場を設けた。各遊び場には、「好奇心→行動→結果→振り返り」のサイクルを取り入れ、子ども達が能動的に遊びを繰り返し楽しむことができるよう工夫をした。当日は3歳～小学生と幅広い年齢の子どもが参加してくれた。参加者数は489人（子ども257人、保護者232人）であった。遊びの結果より、遊びにおけるアタマとココロとカラダのバランスについて分析、考察を進めている。



須之内 元洋

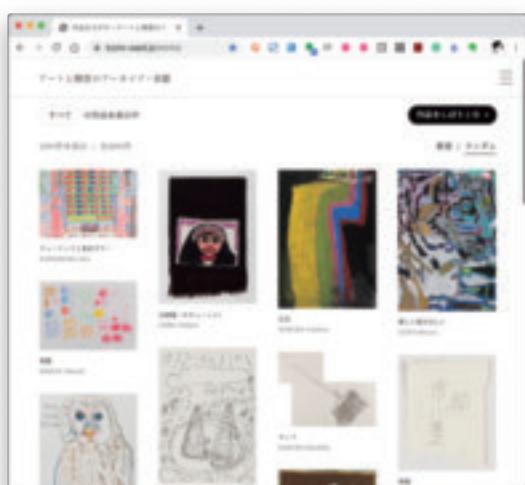
講師 デザイン学部（人間空間デザイン）

SUNOUCHI Motohiro

キーワード：デジタル・アーカイブ、メディアデザイン、アール・ブリュット、福祉施設、美術館

行政や障がい者支援団体が運営する持続的アール・ブリュットデジタルアーカイブの設計

【研究の概要】



近年、障がい者が日常的に行う表現活動が注目されている。障がい者の作品や、作品制作の背景、日々の営みなどを記録・公開することによって、社会とのコミュニケーションや、他者の理解を促進していくための基盤として、デジタルアーカイブの構築が各地で行われており、こうした活動を継続的にサポートしてきた。例えば、京都府が運用する「アートと障害のアーカイブ・京都」(<https://kyoto-aapd.jp/>)では、京都府在住の障害者の方々の作品やストーリーを収集・記録・公開している。継続的に議論を重ねながら、アーカイブの運用や公開方法等について提案・開発デザインを行っている。

金子 晋也

助教 デザイン学部（人間空間デザイン）

KANEKO Shinya

キーワード：木造建築、地域性、北海道

北海道における木造建築デザイン

【研究の概要】

本研究課題は、北海道における木造建築を対象とし、空間構成と木造架構の形式を検証することで北海道の建築文化を問い合わせることを目的としている。このような視点から、科研若手（B）採択課題「寒冷地の住宅建築の活用実態と変容過程に関する研究」、科研基盤研究（C）採択課題「北海道沿岸部における木造建築に関する研究」を行っている。また、「札幌市の西2丁目地下歩道の賑わいを目的としたストリートファニチャー」では、道産の木材を活用したベンチのデザインを実施した。



細谷 多聞

教授 デザイン学部（人間情報デザイン）

HOSOYA Tamon

キーワード：インターラクションデザイン、プロダクトデザイン、
キッズデザイン、触覚刺激、感覚統合

触覚刺激の調整能力を有する幼児向け玩具のデザイン

【研究の概要】

私の専門領域はプロダクトデザインです。特に直近の研究では、幼児を対象とした玩具の設計・制作に取り組んでいます。

近年、発達障害と診断名が付いている子ども以外にも、対人トラブルや集団へのなじみにくさなど、気になる様子の子どもが増えてきています。この原因の一端として考えられるのが、身体と感覚の調整が上手くできることであると考えられています。子どもの成長においては、特に「触覚」による感覚の受容が重要な役割をはたしており、この経験を重ねることで他の様々な感覚と身体の統合が上手くできるようになると考えられています。私の研究が目標とするのは、子どもが能動的に「触る」経験を重ねることを支援する玩具の開発です。この玩具は、子どもの状態に応じて触覚刺激を「調整」し、可変的に目標域へと誘導する仕組みを有するものです。このような玩具開発のため、子どもの「触覚の指標」を明確にすることを目的とし、温度、固さ、接触面積、重さについて試験片を用いた実験を行いはじめました。得られる研究の成果として、子どもが違和感なく触ることができる範囲、および各試験片の違いに気づく触知上の感度についての指標が得られる予定です。

石井 雅博

ISHII Masahiro

教授 デザイン学部（人間情報デザイン）

キーワード：デザイン心理学、バーチャルリアリティ、
ヒューマンコンピューターインタラクション、
情報工学、人間工学

科学的観察手法に基づく人間の特性解明とそのデザイン応用

【研究の概要】

良いデザインを実現するには、受け手である人間のことを熟知する必要があります。これまでの研究経験を基礎として、脳における情報処理機構の解明に取り組み、さらにその応用として、デザインにおける科学的アプローチに取り組みたいと考えています。

安齋 利典

ANZAI Toshinori

教授 デザイン学部（人間情報デザイン）

キーワード：デザイン思考、視覚的対話、落書き、
ワークショップ

落書きコミュニケーション基にした発想とデザイン思考の関係に関する研究

【研究の概要】

（観察・共感(Emphasize)と問題定義(Define)は、落書きコミュニケーションで実施可能であることがこれまでの事例でわかっている。創造(Ideate)については、学生たちによる新たな方法が提案された。「アイデアバイキング」というポストイットに多くのアイデアを描き、プレゼンテーション時に聞き手に選んでもらう方法である。さらに、選ばれたアイデアを模造紙の中央に貼り、ミーティング参加者がその周りに感想や新たなアイデアを書いていく「寄せ書きコミュニケーション」という方法も試された(命名は若林教授)。試作(Prototype)は、単なるアイデアのサムネイルスケッチの領域を出るのは難しく課題である。テスト(Test)は、これまで難しかったが、「アイデアバイキング」により、選択することが、ある意味でテスト(Test)になる。落書きグラフィック上で、良いアイデアにシールを貼るなど、マーキングすることで、その場でのテスト(Test)ができる可能性も見えてきた。



柿山 浩一郎

教授 デザイン学部（人間情報デザイン）

KAKIYAMA Koichiro

キーワード：3D モデル、機械製図、情報プロダクトデザイン、教育ツール

3D プリンタを用いた設計図作図手法教育の為の補助ツールの活用

【研究の概要】

機械製図を学ぶ学生にとって、課題となる（製図の対象となる）造形を、頭の中でイメージすることは難しい。本研究では、製図課題の課題造形の提示時に、視覚的にはもちろん、手で触れることが可能な造形物を提供し、頭の中での立体構築を補助するツールの作成を 2019 年度に行った。

2020 年度は補助ツールを写真（上）のように、製図室に常設し、いつでも学生が利用可能な状況とした。

写真（下）のように、2019 年度までは紙による配布資料(CG)による課題造形の提示のみであったが、2020 年度からは、手で触れる事ができ、自由な角度から造形を把握可能となった。4名に一つ程度の配布となつたが、学生からは形を捉えやすいとの評価を得ると共に、課題造形そのものの説明に要していた時間を大幅に削減することができた。



藤木 淳

教授 デザイン学部（人間情報デザイン）

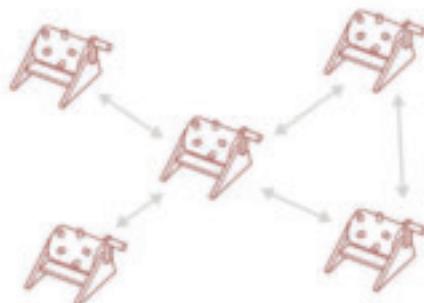
FUJIKI Jun

キーワード：発電、楽しさ、持続性

発電エンターテンメント

【研究の概要】

外部電源を必要とせずに発電のみで持続稼働可能なデジタルエンターテインメントシステムを研究開発しています。災害時においてもゲームは被災者の心身を支えるツールとして人々から求められています。特に近年では停電により電気エネルギーの使用が制限される中において、ボードゲームなどのアナログゲームの需要が増しています。一方、デジタル技術は電子制御により動的駆動が可能、通信により長距離通信が可能といった特徴があります。ゲーミフィケーションという、楽しい体験を取り入れることで単純な作業であっても、モチベーションを向上させるデザイン手法があります。このゲーミフィケーションと発電を組み合わせ、外部電源を全く必要とせずにコンテンツの変化に必要な電気を無意識に発電させるシステムデザインにより、停電時もデジタル技術を用いた楽しさが提供可能となります。



三谷 篤史

教授 デザイン学部（人間情報デザイン）

MITANI Atsushi

キーワード：看護基礎技術教育、ロボット技術、
シミュレーション教育、センシング、3D モデリング

口腔ケアの基礎技術を学ぶための口腔ケアシミュレータの開発

【研究の概要】

本研究では、看護や福祉関係の学生が、口腔ケアの基礎技術を練習するためのロボットを開発しています。口腔ケアは、歯ブラシやスポンジブラシを用いて口の中の汚れや菌を取り除き、口腔内の衛生状態を保つために行われる口内清掃です。この口腔ケアは、高齢者の「口で食べる能力」を維持するためにも重要であり、生活の質(QOL)の向上にも繋がるため、看護や福祉関係の学生にとって学習すべき項目です。しかしながら、教育機関においてその学習環境が充実していないという問題がありました。そこで、本研究では、口腔ケアの学習が可能なロボットシステム(写真)を開発しています。このようなシステムはシミュレータと呼ばれ、これらを用いた教育はシミュレーション教育と呼ばれています。これは、歯の中にブラッシングの力を検出するセンサが組み込まれており、それぞれの歯にかかった力の履歴をコンピュータのモニタで確認できるシステムです。現在は第2モデルが完成し、看護師や介護士、学生に使ってもらい、意見をいただきながら次の改良に向けての検討を続けています。



若林 尚樹

教授 デザイン学部（人間情報デザイン）

WAKABAYASHI Naoki

キーワード：視覚的対話、落書き、ワークショップ、
気持ち温度計、印象評価

落書きコミュニケーションによる視覚的対話と、 それを活用したワークショップの研究

【研究の概要】

視覚的対話手法のひとつである落書きコミュニケーションは、「共感、問題定義、創造、プロトタイプ、テスト、実装」で構成されるデザイン思考プロセスをより効果的にするための手法である。その活用として、株式会社 AIRDO との連携プロジェクトでは、「航空機のより快適でスムースな利用のためのサービスデザイン」をテーマに学生 10 名が参加し、それぞれのテーマに沿って具体的な提案を行なった。その成果は札幌市内のギャラリーでの展覧会において発表を行った。また、オーディオテクニカと連携した「アナログ体験してみよう」プロジェクトでは、学生 10 名が参加し企画とデザイン制作を行なった。これによって 10 月開催の no maps でのワークショップや、12 月開催のサッポロシティジャズでのコースターデザインの制作など地域産業の振興にも貢献することができた。



張 浦華

准教授 デザイン学部（人間情報デザイン）

ZHANG Puhua

キーワード：生活道具、抹茶茶碗、陶芸技法、釉薬

陶芸装飾技法の研究及び作品制作

【研究の概要】

- 1.ポートランド日本庭園で行われた「北の光たち：北海道からの陶芸が再びやって来る」(2019.4.27-5.27)に招待出品され、図1及び図2の作品を展示した。
- 2.台湾桃市政府が主催した「玩美元素-重複X秩序」特別展(2019.11.1-12.29)に招待出品され、抹茶茶碗中心とした作品25点(図3)を展示した。また、展示作品に関するギャラリートークと「抹茶茶碗に映る日本の美意識」の講演を行った。
- 3.セラミックデザインにおける釉薬研究関連制作(図4)。



図1 花器「さざ波」



図2 抹茶茶碗「祭」



図3 抹茶茶碗など

図4 釉薬の研究の関連制作

横溝 賢

准教授 デザイン学部（人間情報デザイン）

YOKOMIZO Ken

キーワード：ビジュアルコミュニケーションデザイン、
情報デザイン、共創、ワークショップデザイン

ランブリングデザイン運動のすすめ

【研究の概要】

ランブリングデザイン運動とは、気軽な態度で地域の現場に入ることから、未知の事象との出会いを濃やかに描き出すデザインアプローチです(図1)。昨年はゼミ生を連れ立って石山緑地をランブリングしました。緑地にはただ者ではない存在感を放つ巨石がそこかしこに鎮座しており、石の形や割れ方、表面の質感を見て触って歩くうちに、私たちは、それらの石がどこから、どんな道具をどのように駆使して、石(札幌軟石)としての造形的存在感を顕にしたのかについて思いを馳せるようになりました。研究ではこうした見えかたが変わるまでの経験や学びのメカニズムを明らかにします。この研究成果は2020年2月28日に旧石切山駅にて展示公開され、石切山で石工だった住民と石山での暮らしや営みについて語り合い、学び合う機会を持つことができました。この時、この場に集まつた人びと(学生、住民、教員)が年齢や場所・時間を超えて、互いの生活世界を重ね合わせて語り合う関係が生まれたのです(図2)。この研究では今後もコミュニティが自律的に形づくられていく過程を追いかながら、共生の知のはたらきを明らかにしていきます。



図1 ランブリングデザインの運動モデル



図2 旧石切山駅での成果発表会の様子

大渕 一博

講師 デザイン学部（人間情報デザイン）

OHBUCHI Kazuhiro

キーワード：地域貢献、産官学連携、学生参加

授業協力から発展した地域貢献

【研究の概要】

本学は地域貢献を使命とし、教職員・学生が一体となって様々な形で地域と関わりを持っています。2019年度は以下のような取り組みを通して、地域に貢献しました。

南区地域振興課には、「南区のブランディング」をテーマとしたデザイン学部2年次開講の授業に参加いただきました。この授業で提出されたデザインをもとに、南区をPRするグッズのデザインを制作し、南区が主催するイベント等に参加された市民の皆様に無料で配布されました。また、南区内各地で開催されている冬のイベント「南区冬の雪あかり 2020」を告知するフライヤーや、広報さっぽろ南区版ページのヘッダーデザインを手掛けました。これらの事業を通じて、「芸術という切り口で南区をPRする」という趣旨のもと、デザイン・アートのつながりを市民の皆様に伝えていくことができたと思います。

これらの授業には本学の学生が積極的に関わっており、学生が授業以外の取り組みにも参加することで、多くの社会経験を積むことができるという教育的な効果を得られています。



金 秀敬

講師 デザイン学部（人間情報デザイン）

KIM SuKyoung

キーワード：感性価値、検証モデル、情報干渉

「甘さ」に着目した マルチモーダル知覚情報の「干渉構造」解明に関する実証研究

【研究の概要】

本研究は、申請者が研究活動スタート支援研究(H28~29 課題番号:16H07097)で実証・提案した評価モデル(以下、「マルチモーダル干渉構造モデル」と称する)の高度化を目的とする。「マルチモーダル干渉構造モデル」では、「感覚器間・内の知覚情報一致可否」および「親近感(馴染みがもたらす情動)」が評価へどのように「干渉」するかについて明らかにする。本研究の目的は、感覚器「間」の情報一致可否のみならず、感覚器「内」の情報一致可否および「親近感」が、例えば感性価値の強化あるいは緩和につながるのか、また強化や緩和が評価にどのように影響を与えるか(=干渉するか)を明らかにすることである。知覚情報は、意識的・非意識的に知覚受容器官を通じてインプットされる。無意識のうちに整理されて、特定の知識として構築される。そのため、知覚情報と評価間の関係を明らかにすることには、知覚がどのように情報化されて、知識として構築していくかについて、究明が求められている。本研究によって感性価値に影響する要素、例えば、「感覚器間・内の知覚情報一致可否」や「親近感」などが評価へ及ぼす効果を定量的に判断できると、より感性価値の高いデザインの提案や創造に結びつけることが可能となる。

福田 大年

講師 デザイン学部（人間情報デザイン）

FUKUDA Hirotoshi

キーワード：参加型デザイン、協創

市民みんなでスケッチし合ってアイデアを生み出す方法の開発

【研究の概要】

私は、市民のみなさんが多様な人の考え方を尊重し合いながら、身の回りにあるモノ・コトを工夫して、面白いアイデアを考えたり、つくったりする協働的な創造活動（これを「協創」と捉えています）が、これから北海道には重要だと考えています。

最近は、協創にとって大切な考え方の解明や技術開発をするため、1) 多様な人たちが一緒にスケッチし合って協創する「協創スケッチ法（通称「くるくるスケッチ」）」、2) 協創に必要な道具を収納する箱を段ボールなど身の回りの素材を使って作る「プロジェクトを支える箱」、3) 身の回りの素材を活かしたデジタルコンテンツが作れるアプリ「tap behavior」の開発に、主に取り組んでいます。

2019年度は、「協創スケッチ法」を使ったワークショップで、どんな協創が生まれるのか、そしてその協創のプロセスの中で参加者のスケッチにどんな変化が起こっているのかを解明する活動を行いました。その結果、スケッチを通して参加者がお互いのアイデアを相互に見ることで、参加者それぞれのアイデアが変化したり相互理解の手がかりとなる特徴を「協創スケッチ法」が持つていることが分かりました。

なお、「協創スケッチ法」はデザイン学部の授業で活用していますが、2019年度は衛星データを活用したビジネス展開をする山口県の衛星データ関連企業の専門家を対象にしたワークショップも行いました。

松永 康佑

講師 デザイン学部（人間情報デザイン）

MATSUNAGA Kosuke

キーワード：コンピュータグラフィックス、仮想身体、
インターラクティブアート、ゲーム

数式に基づく曲線の深度情報による可視化表現

【研究の概要】

一般的な数式で表される曲線の可視化手法は、線による描画である。曲線の内側と外側を別々の色で塗り分けると、境界線が生じ、線を認識することが出来る。本研究では、曲線を線ではなく塗りの違いによって、人間に認識させるための手法を提案し、かつ美しい配色によってこれを実現するものである。平面は曲線によって2つ以上の領域に分割することが出来る。この領域に数式から得られる一定の計算式に基づき色を決定する。本手法を様々な数式に適用した結果を図に示す。



矢久保 空遙

助教 デザイン学部（人間情報デザイン）

YAKUBO Takanobu

キーワード：インターモダリティ、柔らかさ、音

音の特徴と表現の関係に関する研究

【研究の概要】

我々は日常的に音に対して「明るい音楽」や「柔らかい音色」などといった表現をしますが、このような表現は本来音ではなく、視覚刺激や触覚刺激に対して用いる言葉です。私の研究では、このような音に対して用いる表現語を対象として、どのような音に対してどのような表現語が用いられているのかを調査しました。特に、音の高さ、音色、減衰の3つを対象として調査しました。実験では異なる高さの音や、異なる減衰時間を持った音を提示し、「柔らかい・あたたかい・明るい・甘い・香ばしい」の5つの評価をしてもらいました。その結果、音が高くなるほど「あたたかさ」、「柔らかさ」は低くなり、倍音の数が多くなるほど「あたたかさ」、「柔らかさ」は低くなり、逆に「明るさ」は大きくなることがわかりました。

一方で、「柔らかさ」の評価値は 100Hz の評価値よりも 200Hz の評価値が高くなっています。単純に低い方が「柔らかい」とはいえない可能性を示唆する結果となりました。

町田 佳世子

教授 デザイン学部（共通教育）

MACHIDA Kayoko

キーワード：英語、会話らしさ、小学校

英語の会話の特徴を活かした小学校の英会話教育

【研究の概要】

文章のような書き言葉と、日常会話のような話し言葉では同じ日本語でもずいぶんと異なっていることは誰もが気づき意識していることだと思います。具体的にどう違うかというと、会話は1)リアルタイムに進行するので、前もって組み立ててから口にだすことができない、そのため言い直したり、同じことを繰り返したり、完全な文章ではないことが多い、2)場面を共有しているので、これ、あれ、と指さすだけですませることもできる、3)2人以上の人によって行われ、互いに影響を与えあうので、相手に触発されてどんどん話が展開することもあるし、最初に言おうと思っていたことを言えなかったりすることもある、また相手に応じて言い方を変えたり、聞いているよという合図を以てタイミングで送る必要もある、4)言葉にはしない感情や態度も伝わるし5)会話で使われる表現の多くが定型表現、などが会話の特徴です。

このような会話の特徴は万国共通ですから、英語も同じです。ということは、英語の教科書によく見られる「AとBとの会話」は実は会話ではなく、会話ふうの書き言葉でしかないため、これで練習していても実際の場になるとSF小説のロボットの会話のように聞こえ、人間の会話らしさが生まれません。そこで会話の特徴をふんだんに取り入れて、たとえたどたどしくとも会話らしい会話ができるようになるには、どんなやりとりを用いたらよいかを研究しています。特に小学校で英語が導入されましたので、そこで使える教材になるように作っていきたいと思います。

松井 美穂

准教授 デザイン学部（共通教育）

MATSUI Miho

キーワード：アメリカ南部文学、ウィリアム・フォークナー、
カーソン・マッカラーズ、ジェンダー、
セクシュアリティ

アメリカ南部文学研究

【研究の概要】

アメリカ南部文学、特に南部ルネサンス期(1920~50 年代)の文学を中心に研究しています。作家としては、ノーベル賞作家でもあるウィリアム・フォークナー、女性作家ユードラ・ウェルティ、カーソン・マッカラーズなどを研究しています。南部社会は家父長制と人種差別を基盤とした社会であり、人種、ジェンダー、セクシュアリティといった要素が社会システム自体のみならず、その社会の個々人のアイデンティティと深く関わっています。そのような歴史的・社会的・文化的背景をもった南部の作家がどのように「南部とは何か」ということを、その文学的営為において探求したのかを考察することが研究の目的です。具体的には、南部文学の特徴であるゴシック性、グロテスク性に焦点をあてながら、どのような表現形式の持つ意味を考えています。

丸山 洋平

准教授 デザイン学部（共通教育）

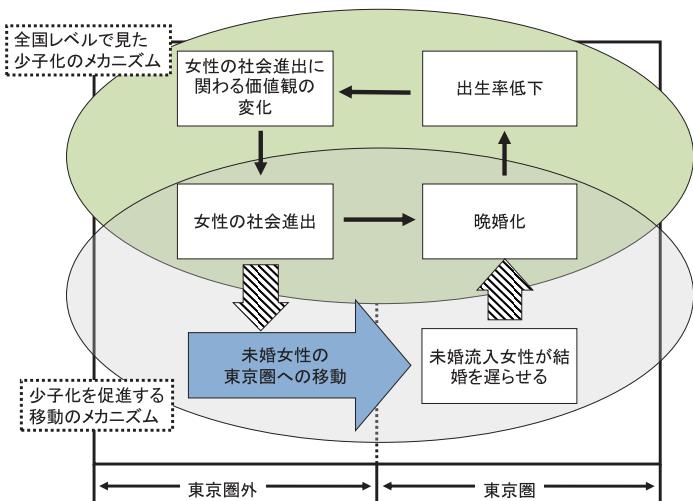
MARUYAMA Yohei

キーワード：人口・家族変動、人口移動、少子高齢化、
地域人口学、地域的差異

人口移動と家族形成行動との関係を明らかにする研究

【研究の概要】

人口の東京一極集中が少子化を加速させているという議論がありますが、実態はよくわかつていません。この命題を考えるには、人口移動の経験の有無、移動のパターン（非大都市圏から大都市圏への移動、離家のタイミングが進学か就職か、など）によって家族形成行動、特に初婚行動に違いがあるのかを明らかにする必要があります。右図は、これまでの研究から私が提起した「移動晩婚相互作用仮説」のイメージです。全国で進む少子化のメカニズムに対し、未婚女性の東京圏への移動がサブメカニズムとして機能するという枠組みで、東京圏へ転入した非大都市圏出身女性の生涯未婚率が高いという分析結果に基づいています。



移動晩婚相互作用仮説の構造イメージ

2. 看護学部

定廣 和香子

教授 看護学部（基礎看護学領域）

SADAHIRO Wakako

キーワード：病院アート、デザインと看護の連携の効果

デリバリー方式によるアート・イン・ホスピタル (in 北海道)

【研究の概要】

空間アート作品を病院に届けるデリバリー方式*によるアート・イン・ホスピタル（病院アート）について研究しています。北海道内の病院からリクエストをいただき、2015年（札幌市）、2017年（小樽市）、2018年（滝川市、札幌市、岩見沢市、千歳市）、2019年（池田町、室蘭市）に、《風の家：Breathing House》（制作：デザイン学部山田良教授）を届けてきました。基本のパツツは同じですが、病院の環境によって異なる作品に変化します。さまざまな病院の《風の家》を比較検討しながら、療養効果の高い空間アート作品の要件や、アート・イン・ホスピタルが普及するための課題などを分析しています。



左：十勝いけだ地域医療センター



右：製鉄記念室蘭病院

*デリバリー方式：なごやヘルスケアアートマネジメント推進プロジェクトの皆様が名付けてくださいました。

樋之津 淳子

教授 看護学部（基礎看護学領域）

HINOTSU Atsuko

キーワード：継続教育、看護コンソーシアム

大学と医療施設の協働による看護師の継続教育の効果

【研究の概要】

看護系大学と医療施設が連携・協働して看護専門職者の人材育成やキャリア支援を行う共同体（看護コンソーシアム）としての活動に取り組んでいます。看護師の教育・研修を個々の施設で行うのではなく、大学の持つ人的、物理的資源と複数の医療・福祉施設の連携・協働による横のつながりによる取り組みが必要であると考え、喫緊の課題である中堅看護師の支援事業から着手して、効果検証を行った。また、活動の一環として、大学と遠隔地の医療施設を遠隔会議システムでつなぎ中堅看護師研修を実施した。中堅看護師は2年次科目の一部をDVDにより視聴し、その後、研修生同士で意見交換をした。本研究は医療施設の教育担当者、受講した中堅看護師からみた研修の効果について半構造的インタビューを行った。その結果、大学の授業を受けた多施設の看護師同士が意見交換することで、初心に立ち返り、改めて日々の看護活動を意識する様子から、教育担当者は研修の効果を認識していたことがわかった。また、遠隔地では、研修そのものの機会がほとんどなく、札幌での研修に参加することもままならない実情から、遠隔研修の期待が非常に高いことがわかった。

大野 夏代

准教授 看護学部（基礎看護学領域）

ONO Natsuyo

キーワード：外国人患者、看護師の英会話

医療者の外国語能力の改善に向けて

【研究の概要】

日本の移民者数はOECD加盟国中4位であり(OECD,2015)、日本国政府の外国人の受け入れに関する政策から(法務省,2019)、在日・訪日外国人は今後も増加すると推測される。日本にいる外国人が医療サービスを受けるにあたって体験する困難のひとつは、医療者との意思疎通である。医療者と患者の意思疎通の不十分を背景とする受診遅延やコンプライアンスの低さの影響は、患者本人の健康上の不利益にとどまらず、例えば周囲への感染症の拡大など社会にとっての不利益もあり、問題は深刻である。

医療者が外国語で外国人患者の対応ができるに越したことはないが、語学の習得には一般に多大な時間と労力が必要であり課題は大きい。研究者は、日本看護教育学会で交流セッションを企画し、共通語としての英語に焦点をあて検討する。社会の変遷に対応し患者中心の安全なサービスを提供する看護師を育成するために、基礎教育では何ができるのかを探りたい。

檜山 明子

講師 看護学部（基礎看護学領域）

HIYAMA Akiko

キーワード：転倒予防、リスクアセスメント、医療安全

転倒予防看護に関する研究

【研究の概要】

転倒は、身体損傷だけでなく、外出を控えたくなる思いや転倒したことによる自己概念の変化によって、精神的な変化を伴う転倒後症候群が発生することもあるため、転倒予防はどの生活の場においても重要な視点である。

転倒予防看護は、対象者の活動したいという思いを尊重しながら、より安全な行動ができるように生活全体を支援する必要がある。一方、安全性を重視しすぎることによって、対象者の活動能力の低下につながりうること、自由意思が尊重されない場合があることも問題である。健康寿命を延伸するためにも、活動性をいかに維持しつつ安全な暮らししができるかという課題は非常に重要であると考えている。

私は、看護の対象が、より健康な生活を送ることができるような援助方法の開発の一つとして、転倒リスク行動アセスメントツールの開発と検証、入院患者に対する看護実践状況の実態、介護施設における活用も検証している。また、客観的に転倒リスクを予測するための方略、病院における転倒予防看護実践を測定する評価尺度についても検討を始めている。転倒リスクを行動という目に見える形でとらえて、看護師とケアの対象者が相互に関係しながら、お互いの力を活用した転倒予防につながるように、引き続き研究を行っていく。

武富 貴久子

講師 看護学部（基礎看護学領域）

TAKETOMI Kikuko

キーワード：理論と実践のギャップ、学習支援

卒前卒後の看護学教育をシームレスにつなぐ試み

【研究の概要】

質の高い看護実践、エビデンスに基づく看護実践に対するニードが高まる一方、基礎看護教育を終え、臨床での看護実践に適応するにあたり、新人看護師は理論と実践のギャップに戸惑うことが多いのではないかでしょうか。また、多忙な臨床で働く看護師が自由に学ぶ学習の場が限定されていることもあります。このような状況をふまえ、卒前教育から継続教育まで、連続性のある柔軟な教育支援ができないかという視点で研究に取り組んでゆきたいと考えています。

渋谷 友紀

助教 看護学部（基礎看護学領域）

SHIBUYA Yuki

キーワード：看護学校、看護基礎教育、ケーススタディ

ケーススタディで重要視する考え方と指導上の困難

【研究の概要】

看護学校の多くでは、看護研究の教育として、また、看護基礎教育の集大成としてケーススタディを活用している。しかし、看護学校におけるケーススタディは、各々のカリキュラム運営や教育環境により実施可能な取り組み内容が異なる。また、指導教員の教育観により指導内容も異なるため、指導を担う教員自身が混乱している状況にある。

そこで、北海道内の看護学校におけるケーススタディの具体的な指導内容を明確にし、看護学校のケーススタディを体系化する必要があると考えた。

多くの看護学校において、学生は1単位30時間の中で看護研究に関する基礎的な知識を学びケーススタディに取り組んでいる。看護学校ではカリキュラム運営上、学生がケーススタディに取り組む際に必要な文献を読み込み理解するために必要な時間を時間割上で確保するのは難しい。同様に、教員による指導時間の確保も難しいという課題が明らかになっている。

また、ケーススタディの指導では何を重要視すべきか、教員が試行錯誤をしている現状も明らかになっている。

教員個々がそれぞれ抱えているケーススタディにおける指導上の困難や重要視する考えを共有する必要性も踏まえ、本研究に取り組んでいる。

高橋 葉子

助手 看護学部（基礎看護学領域）

TAKAHASHI Yoko

キーワード：看護技術、新生児看護

NICUに勤務する看護職の看護技術について

【研究の概要】

看護師が実践するNICUに入院する新生児へのポジショニング技術の文献検討を行った。

対象文献8件中6件で用具を使用しており、仰臥位・側臥位・腹臥位という一般的な体位がとらわれていた。ストレス兆候の減少や睡眠時間の延長等の効果があった。一方で、過度な筋緊張や同一姿勢の保持による頭部の平坦化等の異常が確認された。児の在胎週数や修正週数に応じた調整は行われていなかった。効果が得られたポジショニングの共通点は胎内環境に近い屈曲姿勢であり、用具を用いる場合には、児を囲い込むように頭部・体幹・四肢・臀部あるいは足底を用具に接触させていた。評価指標は多様であったが、注意相互作用系の評価はなかった。

ポジショニングにより過度な筋緊張が生じることが明らかになつたため、現在用いられている体位について再考する必要がある。また、看護師のアセスメントに基づく状況判断と適切な方法の選択により同一姿勢の保持に関連した影響を最小限に図る技術も求められる。児の発達を促すために、最適で心地よい環境の提供に向けて社会面からの評価も取り入れる必要がある。

矢野 祐美子

講師 看護学部（看護管理学領域）

YANO Yumiko

キーワード：看護管理者、継続学習

看護管理者のための継続学習ネットワーク構築

【研究の概要】

日本では少子高齢化を背景に、医療の機能分化と地域連携が促進され、看護管理者には自施設のみならず、地域全体の将来を見据えて各々の施設の果たす役割を再定義し、管理実践を行っていくことが求められている。看護管理者が効果的に役割を發揮するには、看護管理に必要な情報の取得と継続学習が不可欠である。しかし、看護管理者の継続教育や研修の機会は病院規模によって差があることが指摘されている。また、物理的距離が大きい地域における継続学習の機会には、都市部とは異なる困難が伴う。そこで、看護管理者のための継続学習ネットワークを構築することを目的に研究を行っている。

地方における看護管理者の継続学習の実態を明らかにするため、北海道の道央圏外の看護管理者を対象に継続学習やネットワークに関するインタビューを行った。その結果、北海道という広大な地域において、札幌市を中心とする都市部での研修開催だけでは、看護管理者の継続学習を困難にさせることができ明らかなった。移動にかかる時間や費用を軽減できるだけでなく、地域の看護管理者間のネットワーク構築の一助となる地元開催型の研修が有効だとの示唆を得た。現在、看護管理者のための継続学習プログラムを検討しており、その効果を検証する予定である。

鬼塚 美玲

助教 看護学部（看護管理学領域）

ONITSUKA Mirei

キーワード：仕事家庭間役割葛藤、ワーク・エンゲジメント、職場環境、女性看護師

母親役割を持つ看護師のワーク・ファミリー・コンフリクト における因果関係モデルの検証

【研究の概要】

看護師の職場環境は質的・量的に過重である。家庭環境は性役割分業意識によって女性の子育て負担が大きく、女性看護師は仕事と子育ての両立てで様々な困難を経験していると考えられる。その困難の1つがワーク・ファミリー・コンフリクト(WFC)である。WFCの増大はバーンアウトなどネガティブな結果を引き起こすため、増大防止に向けた職場環境づくりが重要である。また、就業継続に向けてはWFCの増大のみならず、ポジティブな仕事上の心的状態を示すワーク・エンゲイジメント(WE)の向上も不可欠である。

そこで、WFCに影響を及ぼす職場環境要因と、WFCがWEに及ぼす影響を明らかにすることを目的に質問紙調査を行った。A県内の母親役割を持つ看護師368名を対象に職場環境、WFC、WEを調査し、共分散構造分析を用いて各変数の因果関係を検討した。結果、良い適合度を示すモデルが得られ、WFCに有意なパスを示した職場環境要因は「雇用形態」.29、「所属部署」.22、「看護の専門性で発揮できる職場環境」-.42であった。職場環境要因のうち、「看護の専門性を発揮できる職場環境」はWEにも有意なパスを示し、重要な職場環境要因であることが示された。WFCからWEへの影響は認められなかった。

松浦 和代

教授 看護学部（小児看護学領域）

MATSUURA Kazuyo

キーワード：モンゴル国、国際支援、発育性股関節形成不全、予防、育児指導

モンゴル国における発育性股関節形成不全ハイリスク群への育児指導とその評価

【研究の概要】

2019年度は日本小児看護学会第29回学術集会（2019年8月3・4日、札幌市、参加者1337名）、メインテーマ『小児看護の知を国際支援へ』を開催し、これまでの研究成果を総括しました。主なプログラム①会長講演；松浦和代『小児看護の知を国際連携へ』、②シンポジウム；安齋利典氏・城戸真紗美氏・Duujee Purevdavaa氏・Dagvadorj Byamba氏『国際支援を通じて結実する小児看護の知—日本-モンゴル発育性股関節脱臼予防プロジェクトから—』、③テーマセッション；牧田靖子氏・松浦和代ほか『モンゴル国における発育性股関節形成不全の予防ケアの実践—技術移転から国際連携へ—』によって、国際支援と研究の実績を紹介しました。モンゴル国の研究研力者4名を招聘し、各自に登壇の機会を設けました。4名にとって学会参加は初めての経験でしたので、学術面での交流が深まり有意義でした。シンポジウムでは、本学デザイン学部教授 安齋利典氏が『デザイン視点からのICT活用による教材制作とその評価』と題して、デザインと看護の連携によって、言葉の壁を超える育児指導教材を開発したことを発表しました。



モンゴル国の赤ちゃんとおくるみ

牧田 靖子

助教 看護学部（小児看護学領域）

MAKITA Yasuko

キーワード：中堅看護師、小児看護技術、看護師教育

中堅看護師に対する相互実演型プログラム研修の効果

【研究の概要】

小児看護では、成長・発達過程にあること、未熟性、意思表示が明確に行えないことなど、専門性の高いスキルを必要とします。しかし少子高齢社会のなかで小児看護に携わる中堅看護師に、その専門性や実践力を維持、向上するための研修会の機会が少ない現状があります。道内の小児看護に携わる看護師を対象に開催している「小児・周産期ケア検討会」において、「小児の点滴固定方法」をテーマに、各施設で実際に使用している物品を持参してもらい、互いに実演しながら共有したり検討したりできる研修（以下、相互実演型研修）を行ったところ、意見交換や施設間における交流が活発になりました。中堅看護師は、すぐに自分の施設のケアを改善していくようなプログラムに対するニーズが高いことが示唆されました。今後も、小児看護に携わる中堅看護師を対象に、「吸入」「薬物投与」等の看護技術について相互実演型研修を計画的に実施していく予定です。そして、中堅看護師の臨床においての判断力、実践力の向上率、ケアの改善率の観点から、相互実演型研修の効果を検証していく予定です。

荒木 奈緒

教授 看護学部（母性看護学領域）

Araki Nao

キーワード：胎児異常、妊婦、助産師、デルファイ法

胎児異常を診断された女性と家族への支援

【研究の概要】

近年、産科領域において出生前診断技術が大きく前進し、様々な方法を用いて妊娠中に胎児の疾病を診断することが可能となった。今後、妊娠中に胎児の形態異常、機能異常、染色体異常、遺伝性疾病を診断される妊婦は急速に増えることが予測され、胎児異常を診断された妊婦の支援体制の構築が急がれる。

しかし、当事者のみならず看護職の両者にコンセンサスの得られた具体的な支援の方法論は未だ開発されていない。そこで本研究では、胎児異常を診断された妊婦や出産後にNICU入院となった新生児の母親と関わることの多い助産師をケアの専門家として位置づけ、専門家の同意の程度や対立する意見のすり合わせを行い、具体的な支援内容のコンセンサスを形成することを目的とし調査を実施している。

現在、全国1200施設にデルファイ法による調査を依頼し、154名の調査協力者を得ている。最終調査までの協力者は101名であり、回収されたアンケート調査結果の分析を進めている。

黒田 紀子

講師 看護学部（母性看護学領域）

KURODA Noriko

キーワード：N I C U、新生児

NICU に入院する児の両親が在宅移行を決断した背景の因子探索

【研究の概要】

N I C Uに入院した赤ちゃんや家族がより笑顔になれますように、と願いながら研究をしております。

本研究は、N I C Uで入院している児の中でも人工呼吸器を装着している児の両親が、児を在宅で養育することに意思決定をした背景を明らかにすることを目的としました。児が人工呼吸器を家庭へ持ち帰る必要があった状態で退院した経験のある母親を対象に、インタビューをして思いを聞きました。

結果、〔児に対する愛情〕や〔家族間での共通見解〕、〔周囲の協力体制〕、〔医療技術に対する自信〕、〔病院の支援〕、〔同じ境遇の家族が見せる姿〕などの思いが聞かれました。退院を決める意思決定には、児への愛情、医療者の支援、家族の一員として迎えたい思い、医療技術やケアに対する自信、ロールモデルとなる存在等、多様な因子が関連していることがわかりました。これらより、医療者としては児の入院先の関わりとして、情報提供や吸引などの医療手技の支援はもちろん、児を家族の一員として愛情をもてるような支援が重要であることが明らかになりました。そして、児の家族を中心とした、入院施設や在宅看護、地域の多職種協働が重要であり、今後も更なる充実が望まれると感じています。

森川 由紀

講師 看護学部（母性看護学領域）

MORIKAWA Yuki

キーワード：生殖医療、女性、意思決定支援

女性への意思決定支援について

【研究の概要】

周産期にある女性、生殖医療を受ける（受けている）女性、がん患者の妊娠性温存を受ける（受けている）女性への支援について。

周産期やその後の育児期における女性、また生殖医療を受ける（受けている）女性が意思決定を行う際には、様々な葛藤を伴う。その意思決定に携わる助産師や看護者にとっても、関わる際には試行錯誤を繰り返すことや、支援内容への妥当性に自問自答を繰り返す。このような意思決定を支援する看護者への支援モデルを検討する。

現在は、女性が抱える意思決定の問題点を類型化し、支援の方向性を焦点化する段階である。

山本 真由美

講師 看護学部（母性看護学領域）

YAMAMOTO Mayumi

キーワード：助産学教育、OSCE（客観的臨床能力試験）

助産学実習前後の OSCE 課題「新生児観察」の得点から教育方法を考える

【研究の概要】

目的：助産師は母子および家族を支援する職種です。その支援のためには、確実な技術の提供が求められます。現在の看護学実習における課題は、実習中において看護場面の見学が多く、看護技術の経験が少ないことです。そこで、看護学部を卒業し、助産師になるために入学した助産学生の OSCE 課題「新生児観察」の得点を実習前後で比較し、今後の教育へ活かすことを目的にしました。

対象：2012 年度から 2019 年度までの助産学専攻科生 75 名。

結果：OSCE 課題の中で、助産学実習後に 6 割に到達しない項目は、「反射の観察」と「清潔な実施」の 2 つの項目でした。

考察：現在の若者の特徴として、家庭生活の中で手を使うことが少ないことがあげられます。本学では助産師になるための実習を 21 週間実施していますが、今回 6 割に到達しなかった「反射の観察」、「清潔な実施」については、実習経験も少なくなっている状況から、一つひとつの技術を確認しつつ、経験を増やしていくこと、および技術が不確実な場合はその都度わかりやすく指導することが必要であると考えます。



石引 かずみ

助教 看護学部（母性看護学領域）

ISHIBIKI Kazumi

キーワード：助産師教育、プロジェクト学習

助産学専攻科におけるプロジェクト学習の効果と課題

【研究の概要】

A 大学専攻科では、学生が「在学 1 年間という限られた期限の中で MY GOAL（自分自身が目指す助産師像に向けた専攻科終了時点での到達目標）を掲げ、その達成に向けて、学生自身が自己の課題を明確にし、その課題解決に向けて学生自身が主体的に取り組みながら学習を進めていく」というプロジェクトをベースとした学習（プロジェクト学習）を支援しています。



本プロジェクトの学生への効果や課題を明確にし、本プロジェクトが助産学生としての成長により寄与するものとなるための研究をしています。

大友 舞

助教 看護学部（母性看護学領域）

OTOMO Mai

キーワード：妊婦、口腔保健、つわり

妊娠初期の女性の口腔保健に関する研究

【研究の概要】

私は、妊娠初期（妊娠 16 週未満）の女性を対象とした口腔保健に関する調査を行っています。齶歯や歯周病は、糖尿病や心筋梗塞などの全身疾患との関連が明らかにされています。中でも周産期では、早産や低出生体重児のリスクとなることが報告されています。そのため、母子のよりよい健康を目指して、妊婦の口腔保健に関する研究を行っています。

妊娠初期は、吐き気や嘔吐などといった「つわり」と呼ばれる消化器症状を自覚する妊婦さんが多くいます。吐き気や嘔吐により、胃酸が逆流し口腔内が酸性に傾くと齶歯にかかりやすくなると報告があります。妊娠期の中でも妊娠初期はつわりにより、口腔内の状態が悪化するのではないかと考え、妊娠初期の女性の口腔内の状態とつわりの程度、生活習慣との関連を調査しました。

調査結果は、口腔内に何らかの症状がある妊婦は、「経産」、「睡眠を 9 時間以上とる」、「歯間ブラシやフロスを使用しない」という要因が関連していました。

妊娠する前からの口腔保健の重要性が明らかとなりました。引き続き、妊婦さんの口腔保健に関する調査をしていきます。

川村 三希子

教授 看護学部（成人看護学領域）

KAWAMURA Mikiko

キーワード：緩和ケア、認知症、疼痛マネジメント

認知症を伴う高齢がん患者の疼痛マネジメントに関する研究

【研究の概要】

がん罹患者の約 7 割が 65 歳以上の高齢者であり、さらに高齢者の認知症有病率は 2025 年には 5 人に 1 人に増加すると推定されており、急速な高齢化を迎える本邦において、認知症を伴う高齢がん患者が増加することは自明である。

認知症を伴うがん患者は痛みを適切に表現できないため痛みの過小評価、過少治療が報告されており、疼痛マネジメントの質の向上が喫緊の課題であり、2014 年度から本研究課題に取り組んでいます。これまでの研究成果を基盤とし、2019 年度は「認知症を伴う高齢がん患者のがんの痛みに対する看護ケアの知識・実践尺度を開発した。次年度以降は、認知症を伴う高齢がん患者に対する看護師の疼痛マネジメントの実践力を向上するために、シミュレーション学習を取り入れた教育プログラムを作成し、この尺度を使用した前後比較による教育プログラムの評価をする予定である。

卯野木 健

教授 看護学部（成人看護学領域）

Unoki Takeshi

キーワード：人工呼吸、集中治療後症候群（PICS）、身体拘束、集中治療室、臨床看護

①ICUにおける人工呼吸患者に対する身体拘束と組織的因子に関する検討 ②計画外抜管と死亡率に関する Systematic Review ③PICSに関する多施設研究

【研究の概要】

①集中治療室における計画外抜管（人工呼吸中に、気管チューブを患者自身で抜いてしまうこと）は、場合によっては生命に関わる問題であり、その予防策として、身体拘束が使用されることが多い。しかし、身体拘束には倫理的な問題や、その後の PTSD 発症と関連しており、単純に推奨できるものではない。身体拘束を行うかどうかは、事故報告書を提出する際に、他のスタッフから責められる度合いや、チームの助け合いも関与していると仮説をたてた。そこで、それらの文化的な背景が各施設の身体拘束率と関連しているかを調査することとした。結果、事故報告書を提出する際に、他のスタッフから責められる度合いほど身体拘束率は高くなることが明らかになった。

②計画外抜管は一般的に問題のあるイベントだと考えているが、その結果、予後がどうなるかに関しては、各研究で一貫性がない。そこで、システムティックレビュー、メタ分析の手法を用いて、計画外抜管は死亡率、在院日数に影響を与えるのかを調査した。

③集中治療を受けた患者のなかには、PICS と呼ばれる、PTSD や不安障害、うつに罹患する患者が一定数いることが国際的には分かっているが、国内ではまだ調査されていない。現在、12 の ICU で調査中である。

小田 和美

教授 看護学部（成人看護学領域）

ODA Kazumi

キーワード：慢性期看護、生活習慣病、患者教育、セルフケア支援、外来看護

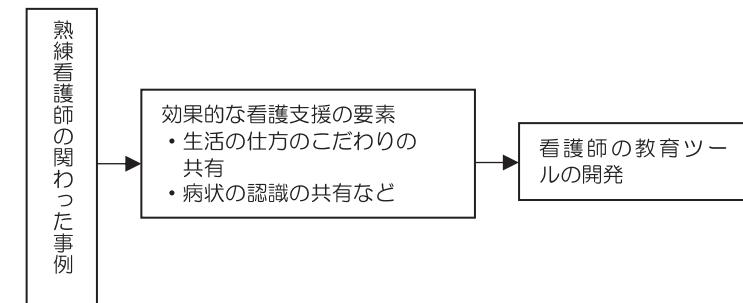
生活習慣病とともに生きる人とその家族への効果的な援助方法に関する研究

【研究の概要】

生活習慣病を代表とする慢性的な病気とともに生きる人々にとって、日々の食事や運動などの生活の仕方そのものが病気の治療となります。どのような援助がこのような慢性的な病気とともに生きる人々のやる気を促して、長年の生活習慣を変える手助けになるのか、効果的な援助方法についての共同研究を継続的に行ってきました。

これまで、療養上の望ましい変化をもたらした看護師の関わりとして、看護師と患者さんが生活の仕方のこだわりや病状についての認識をお互いに共有することが重要であることがわかつきました。

さらに、慢性的な病気とともに生きる人々を障害に渡って支援する方法を探求し、慢性的な病気の人々を支援する看護職のための教育ツールの開発に発展させていきたいと考えています。



神島 滋子

准教授 看護学部（成人看護学領域）

KAMISHIMA Shigeko

キーワード：医療情報の二次利用、授業設計、高次脳機能障害

- ① ナースコールと電子カルテデータの2次利用
- ② ITを用いた双方向授業
- ③ 高次脳機能障害童侍者家族の当事者研究

【研究の概要】

① 電子カルテなどのデータは二次利用によって今後の医療の改善のために用いることが進められています。今回は個人情報を含まない病棟の管理状況（患者の在院数、看護必要度など）とナースコールのデータ（頻度、対応時間、応答時間）などの情報から病棟の忙しさを探索的にとらえられないか？という視点で調査しています。結果は現在分析中です。

② 2019年度のリハビリテーション看護学における授業設計の評価を目的に研究しました。試験的に運用した SchoolTakt と前年度の Office365 の機能と教材としての利用状況を比較しました。SchoolTakt は学生が相互に記録を見ることができ、教員のフィードバックも簡単に行えるため学びを共有することができました。しかし学生相互の書き込みなどは活発だったとは言えません。一方、前年度の Office365 の Onenote は学生個々へのフィードバックは困難でした。しかし、グループの協働作業が行える利点がありました。いずれにしても、学生の IT 活用のハードルは思った以上に高く、学生それぞれの情報リテラシーの違いにより、書き込み量などに違いが見られ、困難感・満足感には差がみられました。

③ 高次脳機能障害をもつ当事者の家族（妻）による当事者研究をサポートしています。この結果は今年度中に出版の予定です。

菅原 美樹

准教授 看護学部（成人看護学領域）

SUGAWARA Miki

キーワード：クリティカルケア看護専門看護師、コンピテンシー

デルファイ調査によるクリティカルケア看護専門看護師の
直接ケアコンピテンシーに関する研究

【研究の概要】

本研究は、日本の CCNS の思考や行動、意欲、態度などを含む直接ケアコンピテンシーを明らかにすることを目的とした。

2018年度に文献およびフォーカス・グループ・ディスカッションによって明らかにしたクリティカルケア看護専門看護師の直接ケアコンピテンシーをクリティカルケア看護の専門家を対象にデルファイ変法を用いて、適切性と難易度について調査した。結果、第1回目のデルファイ調査では、13名の対象者から回答を得られた。直接ケアコンピテンシー62項目中、56項目に80%以上のコンセンサスが得られた。難易度については、システム構築の促進、対人関係問題への介入などに関するコンピテンシーは難易度が高い回答であった。

第1回目のデルファイ調査結果を基に直接ケアコンピテンシーを修正し、パネラーに意見を求めるためにパネルミーティングを実施した。パネルミーティングには対象者13名中9名の参加が得られた。修正した直接ケアコンピテンシーについて、適切性と難易度について議論してもらった。

今後は、パネルミーティングの結果で得られた意見を基に CCNS の直接ケアコンピテンシーを洗練させ、第2回目のデルファイ調査を実施する予定である。

藤井 瑞恵

准教授 看護学部（成人看護学領域）

FUJII Mizue

キーワード：血液透析、糖尿病、セルフケア、継続教育

透析患者の生活支援

【研究の概要】

血液透析患者における通院時間の長さと生命予後の関連が報告されています。また高齢透析患者の増加により、送迎などの通院支援の必要性が議論されています。加えて北海道では、広域かつ積雪寒冷地のため地域や季節に特化した通院の問題を抱えていますが、背景が複雑で実態も把握されていません。長時間通院者を「片道 40 分以上の時間を要し他市町村の施設まで通院する人」と定義し、その状況の把握と看護上の課題を明らかにするための調査を行いました。札幌圏と道東の都市部でインタビュー調査を実施しました。

長時間通院は患者にとって生活時間の制約や経済的な影響があります。しかし住み慣れた土地で自分の望む生活を続けるための条件と捉え、生活を受け入れていました。一方で冬の降雪時期は、通院に不安や問題が生じているものの個人的に対処していました。透析療法は血液透析だけではなく、腹膜透析や腎臓移植もあります。治療法の選択を適切に行うことで、QOL が改善することもあり、治療法の選択への支援も今後の課題と考えています。

工藤 京子

講師 看護学部（成人看護学領域）

KUDO Kyoko

キーワード：呼吸器疾患、患者会、インターネット

呼吸器疾患患者のネット環境状態

【研究の概要】

呼吸器疾患患者の患者会の会員 70 名にネット環境についてアンケート調査を実施した。回収率は 71% (50 名) であり、男性 54%、女性 46% だった。平均年齢は 77 歳だった。現在所有しているものは、携帯電話が 72%、スマートホンが 4%、タブレットが 0%、パソコンが 28% であった。メールを行っているのは 34%、インターネットを行っているのは 22% であった。年代別に見てみると、携帯電話を持っているのは 40 代と 50 代と 90 代が 100%、60 代は 66.7%、70 代は 77.8%、80 代は 66.6% であった。パソコン所持では、40 代と 50 代が 100%、60 代が 33.3%、70 代が 27.8%、80 代が 19% であった。インターネット実施では、40 代と 50 代が 100%、50 代が 33.3%、60 代が 16.7%、80 代が 9.5% であった。これらの結果から、携帯電話の所持は 8 割近くであるがスマートホンへの移行は行っていないことが明らかとなった。パソコンについては、予想どおり少なかったが、70 代や 80 代であっても所持してインターネットを行っている会員がいることが明らかとなり、これらの会員とは離れたところであってもネットを利用して交流ができると思われた。

柏倉 大作

助教 看護学部（成人看護学領域）

KASHIWAKURA Daisaku

キーワード：心不全、塩分制限、食生活、サルコペニア、フレイル

心不全患者の塩分制限に関連した食生活の実態とサルコペニアの関連性検討

【研究の概要】

超高齢化社会の日本では、心不全の患者数は年々増加しており、循環器疾患診療実態調査によると、2016年は26万人であったことが報告されている。心不全の治療・管理は、主に薬物療法と適切な塩分・水分管理であり、急性・慢性心不全診療ガイドラインでは軽症な慢性心不全患者は、塩分を1日6g未満にするよう推奨している。さらに、心不全患者における栄養評価・管理に関するステートメントでは、慢性心不全の患者は、加齢に伴う骨格筋量の減少（サルコペニア）や心身が脆弱である状態（フレイル）を合併することを指摘している。慢性心不全に伴って、サルコペニアやフレイルなどを合併することは、充実した日常生活を阻むものであり、それらを予防するためにも適切な生活習慣が重要である。しかしながら、厳格な塩分制限によって、健康なときと比べて食生活が大きく変化してしまい、食に対する楽しみが失われてしまうことが報告されている。また、塩分制限によって食欲が低下し、食事量の低下に伴って必要なカロリーとタンパク質が摂取されず、十分な食事をしていない可能性があるが、その実態を調査した研究は少ないのが現状である。本研究では、退院した心不全患者の塩分制限に関連した食生活の実態とサルコペニアの関連性を明らかにすることを目的としている。

貝谷 敏子

教授 看護学部（老年看護学領域）

KAITANI Toshiko

キーワード：高齢看護学、スキンケア、看護政策・行政、医療経済学

創傷・オストミー・失禁領域に関するアウトカム研究と医療経済分析

【研究の概要】

高齢者に好発する廃用症候群としての褥瘡やスキンテアが重症化した場合は、入院期間の延長(Scott, Gibran, Engrav, Mack, & Rivara, 2006)や併発する感染(Han, Lewis, Wiedrich, & Patel, 2002)などの合併症治療のために医療費は高騰することから、効果的なスキンケア管理プログラムの導入が検討されている。

これまでに皮膚・排泄ケア認定看護師が実施する高度褥瘡管理技術導入の効率性評価(Kaitani et al., 2015)を行い、診療報酬制度へ反映された後のプログラム評価や「看護師特定能力認証制度」を見据えた先駆的な研究を通して(Kaitani T et al., 2015)、医療プログラムや技術の経済評価を実施している。

今後はプログラム評価に必要なアウトカムとしての褥瘡患者 QOL 評価指標の開発を行う予定である。また、地域包括ケア推進のために在宅や介護保険施設で発生する褥瘡に着目して、介護保険施設における効果的なスキンケア予防方法について検討していく。

村松 真澄

准教授 看護学部（老年看護学領域）

MURAMATSU Masumi

キーワード：高齢者看護、口腔ケア、摂食嚥下、地域ホスピス、クッション、シミュレータ

高齢者の口腔看護データベースシステムの開発に関する基礎研究

【研究の概要】

1. 本研究で構築するシステムの概要は以下の通りである。データベースは、国際的客観的評価指標(Oral Assessment Guide、以下OAGと略す)のほか、年齢や既往歴といった、病院入院者や高齢者施設入居者(以下被験者という)の基本情報などにより構築するものとした。次にWebサーバを構築し、データベースへアクセス可能なシステムを構築した。サーバソフトウェアはApache、データベースはMySQLとなっている。システムはPHPで開発し、看護師や施設職員(以下入力担当者という)がWebベースで口腔ケアに関するデータを入力し、利用後にフィードバック・指導に活用ができるものとした。
2. 上記システムを用いて北海道内9か所の介護福祉施設に於いて入居者269名の前向き研究を実施した。結果は現在分析中である。
3. 口腔ケアで使用されているツールのデータベース構築については、高齢者の口腔ケアにてよく活用されているスポンジブラシのデータベース化についての検討を行なった。ここでは、数種類のスポンジブラシについて、その性質を評価するとともに、製品としての特性を検証するための官能評価実験を行った。
4. 口腔ケア支援における手技動作の教育用映像コンテンツ制作に関する研究について、CGでは教育資料として余計な他の要素を排除でき、また、自由なカメラ視点からの観察及び時間操作が出来ることで、教育上の利点がある可能性を見出した。

原井 美佳

講師 看護学部（老年看護学領域）

HARAI Mika

キーワード：寒冷地、特別豪雪地帯、高齢者、学官連携、健康啓発プログラム

寒冷な特別豪雪地帯の高齢者に対する健康啓発プログラムの開発

【研究の概要】

本研究の目的は、特別豪雪地帯、過疎地域、かつ高い高齢化率の町の高齢者を対象とした学官連携による健康啓発プログラム「いきいき健康塾」を継続的に実施し、健康と生活の質に役立つ内容としていくことである。このような目的に向かい、2019年11月に「第4回いきいき健康塾」として、体組成の測定、調理と食事、講話、コグニティブ、アクティビティからなる4時間のプログラムを開催した。

その構成要素は、①非日常の面白味のある場、②馴染みの人々との交流、③健康や暮らしへの役立ち感、④食を通じた交流、⑤多世代交流、⑥学官連携、⑦参加者が信頼する保健医療スタッフ、⑧運営補助者の若者、⑨研究者と運営補助者とした。参加者は28人で、そのうち女性は27人(96.4%)、参加者の年代は80歳代前半が16人(53.3%)と最も多かった。参加者の言動やアンケートの結果より、「第4回いきいき健康塾」は、町の高齢者の状況に適合した健康と生活の質の向上に資するいきいき健康塾となり得ていたと評価できた。2020年度は、参加者の心身への効果を客観的に評価し得る指標、および運営のための予算について検討を継続していくこととした。

中田 亜由美

助教 看護学部（老年看護学領域）

NAKATA Ayumi

キーワード：高齢者、社会参加、生きがい、健康寿命

高齢者相互の健康支援基盤構築に関する研究

【研究の概要】

高齢者が外出できなくなると、体力・筋力の低下、認知症の発症、持病の悪化、社会との接点の欠如などからくる心身への悪影響が懸念されます。私は、高齢者の外出困難要因を明確化する目的として、2014年9月～12月に北海道A地域において調査を行いました。その要因として、病気や障害、加齢に伴う身体機能の低下など身体的な要因や支援者がいないこと、冬の道路が滑るなどの環境的な要因、経済的負担などが明らかとなりました。そしてさらに、高齢者が外出困難という状況において、孤独感や不安が生じることが明らかとなりました。

我が国では、今後も老人人口の増加は続くと予想され、住み慣れた地域で最期まで安心して生活できる基盤の構築が必要とされています。今後は、あらゆる世代の地域のみなさまが、どんな健康状態でも住み慣れた地域で安心して暮らせるように、高齢者の生きがいや健康寿命の延伸、地域の高齢者と地域住民相互の健康支援につながる実践的な研究を進めて参ります。

守村 洋

准教授 看護学部（精神看護学領域）

MORIMURA Hiroshi

キーワード：メンタルヘルス、自殺予防、シミュレーション教育、精神障害者地域支援、権利擁護

メンタルヘルスに関する研究

【研究の概要】

“メンタルヘルス”と言っても幅広い内容の研究活動をしております。

- ① うつ病・自殺予防；うつは15人に1人が発症する病気です。病気ですので気の持ちようでは治りません。確実に医療につながることが重要です。特にうつになって自分の判断能力が低下して“死にたくなる”気持ちになることがあります。尊い命を守るために、うつ病や自殺予防の講演会など、高校生、一般市民、教職員を対象に実施しております。
- ② 権利擁護；精神の病気になると通常の判断能力が損なうことが見られます。そのため、入院加療の必要性が理解できなかったり、地域での日常生活における金銭管理などが不十分だったりすることが生じます。それらに対して権利擁護を尊重しつつ、適切な医療、および、より良い地域生活を過ごすことができるよう支援をしております。
- ③ シミュレーション教育；専門分野である精神看護学領域でシミュレーション教育を行なっております。救急や産科の領域ではマネキン（人形）を使用したシミュレーション教育が確立しております。精神看護学の領域ではマネキン（人形）では十分な教育はできません。そのため本学で養成している模擬患者さんに協力いただいて、リアリティの高い演習を学生に教授しております。昨年度は精神に障害を抱える当事者の方にも協力をいただきました。

このように、多様な分野でメンタルヘルスに関する研究活動を行っております。

伊東 健太郎

講師 看護学部（精神看護学領域）

ITO Kentaro

キーワード：精神看護、シミュレーション教育、模擬患者、肯定的フィードバック、患者への看護実践

精神看護学シミュレーション教育の効果

【研究の概要】

精神疾患をもつ患者は、疾患が目に見えるわけではなく、看護学生が患者の病態や症状について、講義だけで十分に疾患を理解することが難しい状況にあるといえる。そのため、精神疾患をもつ患者に対して看護学生が適切にケアを行うことは難しい。そのため、模擬患者を使用したシミュレーション教育を導入し、看護実践技術力を向上するための教育方法を検討している。

看護学生は、模擬患者を使った精神看護学シミュレーション教育を行うことによって、看護実践方法について具体的なイメージをもち、患者への関わり方や個別性への理解ができていた。また、肯定的なフィードバックを受け、褒められることにより、看護学生は自信をもつことができていた。臨床実習を行う前に演習でシミュレーション教育を行うことは、看護実践方法の習得や不安感を軽減するうえで効果があるものと考えられる。



菊地 ひろみ

教授 看護学部（在宅看護学領域）

KIKUCHI Hiromi

キーワード：訪問看護、新卒ナース、教育

明日の在宅看護を担う若手訪問ナース育成の取り組み

【研究の概要】

これからのは在宅看護を担う新卒訪問ナースの雇用育成に向けて、道内の大学の在宅教員と共に、「新卒訪問ナースを応援する会（愛称：スタタン）」の活動を行っています。「新人訪問ナース応援フォーラム」を開催して関心のある訪問看護ステーションの管理者や学生、大学教員と意見交換をおこなったり、調査研究を行っています。

将来在宅看護に従事するかどうかはともかく、卒後間もないうちに、「生活を基盤とした看護」をしっかりと学んでおくことは、その後の看護職の視座を養う大切な機会だと考えています。

新卒ナースが普通の進路として訪問看護を選択できる環境を作っています。



高橋 奈美

講師 看護学部（在宅看護学領域）

TAKAHASHI Nami

キーワード：在宅看護、神経難病、筋萎縮性側索硬化症、家族

在宅で療養する筋萎縮性側索硬化症患者とその家族への看護

【研究の概要】

私が専門にしている在宅看護では、病気を持ちながらも住み慣れた自宅で安心・安全に療養できるための看護の方法や環境づくり、システムづくりを専門にしています。その中でも私は、特に筋萎縮性側索硬化症（以下、ALS）患者とその家族への看護について研究をしています。

ALSは、有効な治療法がなく、全身に障害がおよぶこと、徐々に進行していくが、進行を止める有効な治療法は確立されていないことから、診断をされると、患者さんはもちろんのこと、ご家族の人生、生活をも大きく変化させる疾患と言えます。時代とともに、様々なサービスが整備され利用しやすくなっているものの、居住地域において利用できるサービスの量、質は様々であり、また、高齢者の発症や子育て世代における発症など、ケアの方法を考える上でも、対象の多様性を踏まえることが重要です。

住み慣れた自宅で安心・安全に療養するためには、患者さん、そしてご家族をともにケアすることが重要であることから、多様なご家族の状況を踏まえながら、どのようなケアが必要なのかを、患者さんやご家族へのインタビューを通して、丁寧に明らかにし、ケアシステムの構築に役立てたいと考えています。

喜多 歳子

教授 看護学部（地域看護学領域）

KITA Toshiko

キーワード：保健師活動、子どもの貧困、組織、連携

子どもの貧困対策に関する保健師活動の質的研究

【研究の概要】

本研究の最終的な目標は、乳幼児期の貧困による健康への悪影響を最小限にする公衆衛生看護活動の支援体制を体系化することにある。平成30年度～平成31年度に子どもの貧困に取り組んでいる自治体のベテラン保健師23名にインタビュー調査を行った。

その結果、①子どものいる貧困世帯の多くが複合的な課題（若年や未婚の親、心身の障害、孤立、不安定な就労、DVや虐待等）を抱えている。そのため多くの機関との連携・調整が求められている。②その際、保健師に求められる機能は、医学的アセスメントと予防的視点の提供である。③そうした世帯を地域で継続的に支援するためには、地区組織活動が有効であり、地区担当制の保健師活動が有効と考えられる。④貧困対策に保健師が深く関与している自治体では、福祉、医療、警察、学校、地域組織等の連携が臨機応変かつ重層的にシステム化されていた。⑤そのような環境は、経験の浅い保健師の力量を補い、育成する環境となっている。⑥子どもの貧困に関わる保健師の多くは、福祉部門はもちろんのこと、学校との連携が有効と考え、意図的に現場レベルで学校との情報交換を行い、支援に反映させていた。⑦いずれの自治体保健師も地域全体を俯瞰し、母子保健の枠組みを超えた活動を実践していた。

本田 光

准教授 看護学部（地域看護学領域）

HONDA Hikaru

キーワード：親子保健、子育て支援、ソーシャルサポート、社会的孤立

子育て世代における地域との“つながり”

【研究の概要】

社会的孤立は公衆衛生の分野において、各国で研究が重ねられており、今や世界的な関心事の一つになっています。例えばイギリスでは孤独担当相が任命され、国策としてこの問題に向き合っています。社会的孤立は、精神的な抑うつ症状だけでなく、循環器疾患や高齢者のフレイルの進行にも影響があることが報告されています。その生理学的なメカニズムも解明されつつあります。私は、この孤立の問題を「子育て」という側面から研究を続けています。現在は、これまでの研究成果を活用して、日本のお家芸である情報技術やロボットなどとコラボした新しい価値を生みだせないかと模索中です。



子育てママの“地域とのつながり”を
育むロボットアプリの開発および
その効果と課題の検証

近藤 圭子

助教 看護学部（地域看護学領域）

KONDO Keiko

キーワード：自己効力感、高齢者の健康、健康行動、地域医療

高齢者の自己効力感と健康への意識に関する研究

【研究の概要】

わが国は、高齢化率が上がり、医療費や介護費が増え続けていることから、高齢者の健康を保つことや、高齢者が自立した生活を送ることは、極めて重要な課題である。高齢者の健康を保つことは、社会保障給付費を減らすだけでなく、豊かな生活を送り続けるためにも重要と考える。高齢者ができるだけ介護を必要とすることなく、自立した生活を送るために、高齢者自身が健康に対する意識づけを高めることや、良い生活習慣の保持が重要であると考え、自己効力感、健康行動など高齢者のQOL に関連するさまざまな要因を検討することを目的とした研究を行っている。地域の高齢者の自己効力感、健康行動や健康に対する意識についての研究を進め、地域で生活する高齢者の健康について検討していくたいと考えている。また、地域医療についても関心があり、地域医療の問題について住民の思いの実態を把握し、地域医療に対する住民の理解を高めるためにはどのようにアプローチできるかを考える研究を進めている。

田仲 里江

助教 看護学部（地域看護学領域）

TANAKA Rie

キーワード：コンソーシアム、キャリア教育、中堅看護師研修、
WEB会議システム

大学と遠隔地の病院を WEB 会議システムでつないだ中堅看護師研修の効果検証

【研究の概要】

A 大学で看護倫理学の授業の一部を遠隔授業として公開する方法で中堅看護師研修を実施した。本研究では、研修に参加した中堅看護師が所属する施設の教育担当者が継続教育に対して認識する研修効果や課題を明らかにすることを目的とした。研究協力の得られた教育担当者 4 名を研究対象とし、個別インタビューを実施した。分析の結果、《期待する中堅看護師像を意識した研修の仕掛けや研修評価の強化》《基礎教育から継続教育へ繋げる研修機会の充実化》《研修受講への組織的サポート》《遠隔授業を受講したことにより得た遠隔授業に対する期待》などの 7 カテゴリーに集約した。教育担当者は、期待する中堅看護師像を意識し、研修対象者が研修機会を得られるよう研修企画や遠隔授業の内容を大学と連携しながら取り組んでいた。また、研修に参加しやすい仕組みや組織的サポートを行っていた。さらに遠隔授業の発展を期待しつつ、基礎教育から継続教育へ繋げる研修機会の充実も望んでいた。その一方で継続教育や研修内容の検討について苦悩やジレンマを認識し、人材育成についての支援を得たいというニーズが明らかになった。

札幌市立大学 教員研究紹介 2020

編 集 札幌市立大学地域連携研究センター
発行日 2020（令和2）年8月21日
発 行 札幌市立大学地域連携研究センター
〒005-0864 札幌市南区芸術の森1丁目
TEL. 011-592-2346 FAX. 011-592-2369
<https://www.scu.ac.jp>
E-mail:crc@scu.ac.jp



www.scu.ac.jp

札幌市立大学
SAPPORO CITY UNIVERSITY

大学本部・デザイン学部・デザイン研究科
芸術の森キャンパス:005-0864 札幌市南区芸術の森1丁目
TEL. 011-592-2300

看護学部・看護学研究科・助産学専攻科
桑園キャンパス:060-0011 札幌市中央区北11条西13丁目
TEL. 011-726-2500